

Web 調査による新しいエゴグラムの尺度開発¹⁻³⁾

聖心女子大学文学部 和田 迪子

東洋英和女学院大学人間科学部 渡部 麻美

目白大学人間学部 市村 美帆

筑波大学人間系 松井 豊

New egogram developed by Web survey

Michiko Wada (*Faculty of Liberal Arts, the University of the Sacred Heart, Tokyo 150-8938, Japan*)

Asami Watanabe (*Faculty of Human Sciences, Toyo Eiwa University, Kanagawa 226-0015, Japan*)

Miho Ichimura (*Faculty of Human Sciences, Mejiro University, Tokyo 161-8539, Japan*)

Yutaka Matsui (*Faculty of Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

Based on the web survey, new Egogram has been developed. From a preliminary survey of college students (N=117) and two web surveys (N=564, 1072), reliability (internal consistency, temporal stability) and concurrent test validity were confirmed. The new Egogram is composed of Controlling Parent (CP) Nurturing Parent (NP), Adult (A), Natural Child (NC), Adapted Child (AC), Demonstrative Child (DC), Deviation Scale, Question Scale. The new Egogram is characterized that conventional C is divided to NC, AC, and DC.

Key words: Egogram, Transactional Analysis, Controlling Parent, Natural Child, Demonstrative Child

本研究では、交流分析 (Transactional Analysis)

理論に基づくエゴグラムの構成概念を修正し、Web パネル調査に基づいて、新しいエゴグラムを開発することを目的として、一連の研究を行う。

エゴグラムの展開

交流分析は、1950年代後半にアメリカの精神科医 Eric Berne (1910-1970) が創始した心理療法である。我が国へは1972年九州大学医学部心療内科の池見、杉田によって、心身症・神経症の心理療法として導入された (杉田, 1973)。その後、自己分析や対人関係調整、自己啓発に役立つことから、医療現場に止まらず産業界や教育機関、家庭裁判所などでも活用されたり、一般家庭でも夫婦や親子の関係調節に使われている。

交流分析では、心のあり方を、「親の自我状態 (Parent: 以下 P と略す)、大人の自我状態 (Adult: 以下 A と略す)、子どもの自我状態 (Child: 以下 C

- 1) 本研究を立案し論文を作成するにあたり、福岡県立大学名誉教授・日本交流分析学会名誉理事長・杉田峰康先生に多くのご助言を頂きました。記して、ここに感謝申し上げます。
- 2) 本尺度は本研究後、第1著者により著作権を設定され、「ザ・セルフグラム[®]」として刊行された。そのため、尺度項目の完全リストを呈示できない。全尺度項目を入手されたい方は、第1著者にご連絡を頂きたい。
- 3) 本研究のデータの一部は、日本交流分析学会第38回学術大会 (和田, 2013)、日本パーソナリティ心理学会第22回大会 (渡部・市村・松井・和田, 2013)、日本交流分析学会第39回学術大会 (和田, 2014)、日本交流分析学会第40回学術大会 (和田, 2015) において発表された。

と略す)」の3つの心(自我状態)から構成されていると考えられている(Stewart & Joines, 1987)。

交流分析の機能分析の考え方によると、Pの働きの要素は、理想を追求し責任感、倫理観が強い「批判的な親(Critical Parent: 以下CPと略す)」と優しく思いやりのある「養育的な親(Nurturing Parent: 以下NPと略す)」に分かれる。CPが強ければ批判的、保守的、弱ければルーズになる。NPが強ければ世話焼き、弱ければ冷淡である。Aの働きの要素は、冷静に事実を把握し客観的かつ沈着な行動を導く現実検討能力である。Aがあまりに強いと論理的で無味乾燥、人間味が損なわれる。弱すぎれば現実検討能力がなくなる。Cの働きの要素は、幼い頃の本能的な行動や考え、感じ方など、生来の本能的な欲求をそのまま表す「自由な子ども(Free Child: 以下FCと略す)」と、人生早期に親や周囲との関係の中で自然に身に着けた処世術、イイ子、イエスマンの「順応した子ども(Adapted Child: 以下ACと略す)」に分かれる。FCが強ければ自由奔放でわがまま、弱ければ萎縮を意味する。ACが強ければ自然な感情を抑えすぎて不健康に、弱ければ協調性に欠ける(Stewart & Joines, 1987)。

エゴグラムは交流分析の機能分析から発展した理論で、Berneの弟子Dusayが考案した。Dusay(1972)が開発したエゴグラムは自我状態の概念を学んだ後、自らを振り返って5つの要素の高低を、自身の判断で棒グラフに表すものであった。しかし、このエゴグラムの描き方はあまりに直観的で客観性に欠けるため、Heyer(1979)によって質問紙法エゴグラムが開発された。

日本では、池見・杉田(1974)がエゴグラム・チェックリストを考案し、その後、石川・岩井・森田・菊池(1977)、杉田・新里・和田・瀬川・石川(1979)が改良を加えた。機能分析の5つの要素を質問紙尺度にして、回答結果が5尺度で表せるように作成した。出来上がったエゴグラム・プロフィールは折れ線グラフで表現され、各尺度の高低のパターン全体から回答者の性格特徴が把握できるものであった。

質問紙法エゴグラムは、自己分析に役立つ客観的なツールとして確立し、その後、臨床場面で応用され普及した。しかし、同手法には信頼性や妥当性に不十分な点があったため、和田・伊藤・十河・石川(1982a, 1982b)、和田・石川・十河・伊藤(1984a, 1984b)や石川・和田・十河・伊藤(1984)は「新しい質問紙法エゴグラム(東大式)」の開発を行った。石川ら(1984)は、質問項目について、以下の質問項目の選定基準を設定した。交流分析を学んだ

者であれば明らかに5尺度の一つを表現していると判断できる項目であること。できるだけ具体的な場面設定があり、形容詞は原則として取り入れないこと。直接表現の肯定文で、わかりやすい簡潔な文章表現であること、などである。

これらを基準に、項目原案127項目で予備調査1800人に実施し、項目を絞り込んで、4000人余の一般成人対象に本調査を行った。その結果、各尺度10項目ずつの50項目に妥当性尺度を加えた計60項目から構成される「東大式エゴグラム(初版)TEG」が開発された(石川ら, 1984)。

これまでのエゴグラムでは実用化に疑問があった部分TEGの誕生でかなり解決された。TEG初版は、幅広い分野で多くの人たちに利用され普及した。その後、質問項目の一部を入れ換える作業が必要となり、一般成人5000人余の調査を経て1993年に「TEG第2版」が完成し、さらに多方面で自己分析に使われた(野村・和田・久保木・末松・横山, 1993)。

その後日本では独自のエゴグラム開発の流れができ、多彩なエゴグラムが次々開発されている(西川, 1993; 芦原・酒井・伊藤・陶山・上原・高尻・村上・松野・桂, 1993)。しかし、これらのエゴグラムには、以下4点の問題が指摘される。

従来のエゴグラムの問題点

第1の問題は、回答者の偏りである。たとえば、TEG初版、TEG第2版ともに、調査対象者は一般成人男女合わせて約数千人であったが、回答者が一部の企業に集中していた(和田ら, 1984a, 1984b; 野村ら, 1993)。従来のエゴグラムには、回答者が一般成人のランダムサンプルでないことが問題として指摘される。

第2の問題は、CPの「批判的な親(Critical Parent)」の概念構成である。従来のCPは責任感、倫理観が強い一方、頑固や批判など自身の価値観などを一方的に押し付ける態度も強調されていた。たとえば、TEG第2版のCPの質問項目の一部をあげると、「気が短くて怒りっぽい」「わがままである」「がんこで融通がきかない」など、個人的な価値観の一方的な押し付けが目立っている。「わがままである」はFCと誤解される内容である。このように従来のCPの概念にはFCの概念が混入していた可能性がある。

そこで本研究では、CPを「管理する親(Controlling Parent)」と改変する。「管理する親」とは、責任、義務などの社会的規範維持と公への意識などを含む倫理的色彩が濃いものとする。このように改変することにより、FCと概念が分離できると期待される。

第3の問題は、FCの「自由な子ども (Free Child)」の構成概念である。従来のFCは、本能的な行動や考え、感じ方を強調していた。たとえば、TEG初版のFCの質問項目の一部には、「気分の変化が激しい」「気が短くて怒りっぽい」「言いたいことを遠慮なく言ってしまう」など、CPと誤解される部分もあった。TEG第2版のFCの質問項目では自己中心的な部分を改変し、「陽気にふるまう」「冗談を言ったり軽口をたたくのがうまい」「活発である」「遊びの雰囲気には抵抗なくとけこめる」など、その時の気分や感情で行動を起こすことを強調した。本来、Cの自我状態は人間が生まれたままの姿で、生きるための自然随順の営みが根幹にあると考えられている(和田・野村, 1995)。FCでは日々の感情や欲求が中心であったが、いざというときの生き延びるための本能をベースにした瞬時の判断力や直観力、創造性や独創性がCの自我状態の中心であると考えられる(和田・野村, 1995)。

本研究ではFCをNC「自然な子ども (Natural Child: 以下NCと略す)」と改変する。NCは生まれながらの自然随順の営みや創造性、直観力の源とする。

第4の問題は、ACの「順応した子ども (Adapted Child)」の概念構成である。Dusay (1995)は、ACを「Compliant」と「Demonstrative」に分ける案を提唱した。提唱の理由としてDusay (1995)は、以下の例を挙げている。親からの命令に、躊躇しながらも親の期待に沿おうと子どもが「はい」をいう場合は、ACの中の「Compliant」が反応している。一方、「いや」と否定を突き付ける場合は「Demonstrative」が機能し、この行動には親から注目されたい気持ちが隠れている。「いや」と逆の行動をとることで、相手を操作したい気持ちが伺われると述べている。このように、ACは、ACCとACDに分けることができる。

2種類のACの問題は、「イイ子がキレル」などの現象や、企業で若い人たちの中で「うつ状態」や「うつ病」と診断される人たちが増えてきた現象と関連すると考えられる(野村, 2011)。

ACを2つに分けて捉えれば、「イイ子がキレル」現象は、以下のように説明できる。ふだんは「Compliant」として「イイ子」であった者が、溜まった怒りや不満が我慢できずに爆発したときに、「Demonstrative」で反応し、心のエネルギーを発散したと考えられる。言い換えれば、「イイ子がキレル」などの行動化は、「Compliant」と「Demonstrative」の心のエネルギーの過不足関係にあると考えられる。

若い人の「うつ」に関しては、うつになりやすい人はふだん、本当の気持ちは「ノー」なのに無理をして「イエスマン」を演じており、本来の感情を抑えて「Compliant」で反応している。この演じている期間が長ければ長いほど、自身の本音が何であるかが分からずに、不満のエネルギーが溜まり、その結果落ち込むうつにいたる。これが若い人たちが「うつ状態」、「うつ病」になる遠因と考えることができる。

これらの傾向は既存のエゴグラムではつかみにくく(野村, 2011; 白波瀬, 2014)、ACをACCとACDに分けて捉える必要がある。

ACの分割については、Berne (1972)がACとRC「抵抗する子ども (Rebellious Child)」に分けており、Wagner (1981)がこの概念構成を具体化させている。Wagner (1981)は、Cの自我状態をNC「自然な子ども (Natural Child): 生まれながらの人格」、CC「従順な子ども (Compliant Child): 本当の感情は隠す」、RC「反抗する子ども (Rebellious Child): 否定的な態度」、LP「小教授 (Little Professor): 直観的、創造的で第六感」に分け、ACをCCとRCを統合したときの呼称と捉えていた。

Heyer (1987)は、ACの機能的側面を探ることを目的に質問紙(自我状態パーソナリティ・プロフィール) (Heyer, 1979)を使って調査している。調査は、ビジネスや政府関係の研修プログラム受講者、自己開発プログラム受講者、様々な治療カウンセリングを受けている806人と、組織開発関係者、大学レベルの学習プログラム受講生や一般人715人を対象に実施された。調査の因子分析の結果、ACは順応、従順な「Conforming」と感情をハッキリ示す「Demonstrative」の2つ構成要素に分かれ、「Demonstrative」には反抗や自身に対する悪感情が含まれていた。

本研究では上記の研究動向を踏まえ、ACをACC「従順な子ども (Compliant: 以下ACCと略す)」とACD「主張する子ども (Demonstrative: 以下ACDと略す)」に分割する。ACCは、従来のエゴグラムにおけるAC同様に、人生早期に親や周囲との関係の中で自然に身に着けた处世術であり、イイ子、イエスマンで「はい」と答える従順な姿とする。ACDは親や周囲から言われたことに従うことができず、自分の存在をアピールする自己主張であり、屈折した自己愛的怒りも含むものとする。

本研究の目的

本研究では上記の問題を解決するために、エゴグラムの改訂を試みる。

第1の回答者の偏りの問題に関しては、ランダム

サンプルに準ずる一般成人を対象にした大規模サンプルの Web パネル調査を実施する。

第2に、CPの「批判的な親 (Critical Parent)」を「管理する親 (Controlling Parent)」とする。CP「管理する親 (Controlling Parent)」は、責任、義務などの社会的規範維持と公への意識などを含む倫理的色彩が濃いものとする。

第3に、FCの「自由な子ども (Free Child)」を「自然な子ども (Natural Child)」とする。NCは生まれながらの自然随順の営みや創造性、直観力の源とする。

第4に、ACの「順応した子ども (Adapted Child)」をACC「従順な子ども (Compliant)」とACD「主張する子ども (Demonstrative)」に分割する。ACCは、これまでのAC同様の人生早期に親や周囲との関係の中で自然に身に着けた処世術、イイ子、イエスマンで「はい」と答える従順な姿とする。ACDは親や周囲から言われたことに従うことができず、自分の存在をアピールする自己主張である。この中には屈折した自己愛的怒りも含むものとする。そのため、ACDに関連する項目として、怒り・不安にかんする項目を含めることとした。

なお、TEGなどの従来のエゴグラムでは、特殊な反応をする傾向を測定するD尺度 (偏倚尺度, Deviation Scale) がある。本研究でも大多数の回答者とは異なる回答を示す回答者を把握するために、D尺度を構成することとした。また、3件法の回答で「どちらでもない」の回答を集計するQ尺度 (疑問尺度, Question Scale) についても、同様に集計することとした。

以上のような修正を行った上で、本研究では新しいエゴグラムの作成を試みることを目的とする。

研究手順としては、各尺度選定のために予備調査を行い、尺度構成のための第1調査と、併存検査妥当性と再検査信頼性を検証する第2調査を行う。

予備調査

新エゴグラムの項目選定にあたり、予備調査を実施した。調査対象者は、関東地方の国立大学の大学生であった。A版の回答者は68名 (男性17名、女性51名、平均年齢21.0歳)、B版の回答者は49名 (男性21名、女性28名、平均年齢21.3歳) であった。

調査項目は、新エゴグラムのCP21項目、NP21項目、A21項目、NC23項目、ACC21項目、ACD25項目、怒り・不安20項目であった。項目の作成にあたっては、第1著者が素案を作成し、他の著者を含めた協議によって文章表現の修正を行なった。全体の項目

数が多いため、回答者の負担を低減させる目的でA版とB版の2種類の質問紙を作成した。A版にはCP、NP、A、NCの計86項目、B版にはACC項目、ACD項目、怒り・不安項目の66項目が含まれた。選択肢は、「1. はい、2. どちらともいえない、3. いいえ」の3件法であった。また、答えにくいと感じる項目にチェックをするように求めた。

予備調査の結果をもとに、除外する項目の候補を選定した。除外対象となった項目は、下位尺度ごとの主成分分析における負荷量が.35以下であった項目、答えにくいと回答した回答者が2名以上いた項目、「どちらともいえない」を選択した回答者が40%を超えた項目、「はい」を選択した回答者が80%を超えた項目であった。これらの項目を削除した結果、CP11項目、NP16項目、A12項目、NC19項目、ACC13項目、ACD19項目、怒り・不安18項目となった。

第1調査

方法

2013年4月に、南関東に居住するgooリサーチモニターである20~59歳の成人2000名から、性年代別に70名ずつ調査対象者をサンプリングした。回収数は564名 (男性281名、女性283名) であった。

予備調査の結果をふまえて、新尺度の各下位尺度について、項目の追加や項目内容の修正、類似した項目の統合を行った。また、予備調査で「はい」の選択率が80%を超えた項目をもとにD尺度を設定した。第1調査で使用した項目は、CP18項目、NP17項目、A18項目、NC19項目、ACC18項目、ACD18項目、怒り・不安17項目、D8項目の133項目であった。選択肢は「1. はい、2. どちらともいえない、3. いいえ」の3件法であった。

結果

本研究で新たに考案したACC、ACD、怒り・不安の項目について因子分析 (主成分分解; プロマックス回転) を行なったところ、3因子構造を示した。第1因子にはACDと怒り・不安の項目のうち、怒りに該当する5項目が高い負荷量を示した。第2因子には怒り・不安の残りの12項目とACCの3項目が高い負荷量を示した。第3因子にはACCの残りの15項目が高い負荷量を示した。因子分析の結果から、ACDは怒りを含む概念であると想定されるため、第2調査では、この因子分析の第1因子の項目をACC、第3因子の項目をACDの尺度として扱った。

各下位尺度の項目について、主成分分析を実施し

Table 1
第1調査における新・エゴグラム（仮称）の下位尺度間の相関係数

	M	SD	CP	NP	A	NC	ACC	ACD
CP	26.76	4.37						
NP	28.03	4.88	.54**					
A	27.98	4.79	.58**	.35**				
NC	26.01	5.12	.57**	.53**	.45**			
ACC	27.66	5.24	-.16**	.08	-.25**	-.37**		
ACD	21.72	5.50	.07	-.12**	-.10*	-.11*	.06	
D	31.14	3.59	.64**	.78**	.52**	.50**	.04	-.17**

注) * $p < .05$ ** $p < .01$

た。ACDについては、上述の因子分析で同じ因子に高い負荷量を示した怒りに該当する5項目を合わせた23項目で分析を行なった。また、D尺度については、当初D尺度の項目として設定した8項目と、CP、NP、A、NC、ACC、ACDの各項目のうち、「いいえ」の選択率が5%以下であった16項目で分析を行なった。

下位尺度ごとに主成分分析で高い負荷量を示した上位12項目を、得点が高いほどその傾向が高いことを示すよう逆転処理を行なったうえで合計し、各下位尺度の得点とした。なお、ACCのみ13項目を合計した。

各尺度間の相関係数をTable 1に記載する。ACCとACDとの間には有意な相関は見られなかった($r = .06, n.s.$)。さらに、ACDは他の尺度とも弱い相関のみしか見られなかった($r = -.17 \sim .07$)。これらの相関の結果から、ACCとACDをそれぞれ独立した新尺度として採用することとした。

第2調査

方法

2013年5月に、南関東に居住するgooリサーチモニターである20~69歳の成人4000名から、性年代別に100名ずつ調査対象者をサンプリングした。回収数は1072名(男性527名、女性545名)であった。

調査項目は、第1調査の結果から項目を精選した新エゴグラム78項目であった。新エゴグラムの下位尺度は、CP12項目、NP12項目、A12項目、NC12項目、ACC13項目、ACD12項目、D12項目であった。D尺度のうちの7項目は他の尺度と重複していた。さらに、併存検査妥当性の検証のためにTEG第2版60項目を用いた。新エゴグラムとTEG第2版のいずれも、選択肢は「1. はい、2. どちらともいえない、3. いいえ」の3件法であった。

Table 2
CP主成分分析

項目例	負荷量
目標達成には努力を惜しまない	.73
決めたことは最後までやり遂げる	.73
信念を貫き通す	.70
自分の責任は必ず果たす	.67
正義感が強い	.67
⋮	⋮
負荷量平方和	4.39
寄与率	36.61

Table 3
NP主成分分析

項目例	負荷量
人の苦しみや悲しみを親身になって心配する	.76
他人を大切にする	.74
他人を励ます	.74
人を受け入れている	.68
人の立場や気持ちを理解する	.67
⋮	⋮
負荷量平方和	5.12
寄与率	42.69

第1調査・第2調査の双方に回答した対象者は141名(男性73名、女性68名)であった。

結果

第2調査の結果をもとに、新・エゴグラムの各下位尺度について主成分分析を行った(Table 2~8)。

新エゴグラムの各尺度とも、高い負荷量を示した負荷量上位10項目を当該尺度の項目として採用した。ただし、D尺得点が高いほどその傾向が高いこ

とを示すよう逆転処理を行なったうえで合計点を算出し、各下位尺度の得点とした。TEG第2版についても、逆転処理の後、下位尺度ごとに項目を合計し、各下位尺度の得点とした。なお、ACDについては、負荷量が7番目に高い項目が他の項目と類似する内容であったため、代わりに11番目の項目を使

用した。

新エゴグラムとTEG第2版の各下位尺度のアルファ係数を算出した (Table 9)。新・エゴグラムの下位尺度は、いずれも $\alpha = .80$ 以上の高い値を示した。

新エゴグラムの下位尺度について、第1調査と第

Table 4
A 主成分分析

項目例	負荷量
物事を分析して考える	.76
効率よく物事を進める	.72
論理的に話をする	.71
理性的に考える	.71
物事の順序を決めたり、計画を立てたりするのがうまい	.69
⋮	⋮
負荷量平方和	5.01
寄与率	41.71

Table 5
NC 主成分分析

項目例	負荷量
明るくて楽天的である	.74
人生に対して前向きである	.72
ハキハキして元気である	.69
気持ちがさっぱりしている	.68
気分転換が上手である	.68
⋮	⋮
負荷量平方和	4.75
寄与率	39.56

Table 6
ACC 主成分分析

項目例	負荷量
思ったことがなかなか言えない	.78
人と意見があわないとゆずってしまう	.65
嫌なことでもがまんしてしまう	.63
ぐずぐずして決断できない	.63
おとなしい	.62
⋮	⋮
負荷量平方和	4.45
寄与率	34.23

Table 7
ACD 主成分分析

項目例	負荷量
我慢できなくなると急に怒ったりする	.73
自分の主張が受け入れられないと、腹を立てる	.73
自分の思い通りにならないと誰かを責める	.72
嫌なことが少しでもあると、声を荒げてしまう	.70
うまくことが運ばないとき人を責めたくなる	.69
⋮	⋮
負荷量平方和	5.13
寄与率	42.73

Table 8
D 主成分分析

項目例	負荷量
人の立場や気持ちを理解する	.71
周りの人へ配慮する	.69
人との調和を大切にする	.65
人の話によく耳を傾ける	.63
周囲の人たちに感謝の心を持っている	.62
⋮	⋮
負荷量平方和	4.18
寄与率	34.83

Table 9
新・エゴグラム (仮称) と TEG 第2版の
下位尺度のアルファ係数

	新・エゴグラム (仮称)	TEG 第2版
CP	.84	.78
NP	.87	.83
A	.87	.83
NC	.85	.82
ACC	.83	.85
ACD	.86	.85
D	.83	.67

注1) NCはTEG第2版ではFCに該当する。

注1) ACCとACDはTEG第2版ではACに該当する。

2 調査の相関係数を算出した (Table 10)。CP .81, NP .82, A .83, NC .85, ACC .81, ACC .76, D .78 (いずれも $p < .01$) であり, 十分な再検査信頼性を示した。

さらに, 第 2 調査における新エゴグラムと TEG

第 2 版の下位尺度間の相関を算出した (Table 11)。新エゴグラムの下位尺度と対応する TEG 第 2 版の下位尺度は, CP と CP ($r = .22, p < .01$), ACD と AC ($r = .09, n.s.$) を除き, 高い相関を示した。

考 察

本研究では, ランダムサンプルに準ずる一般成人 Web パネル調査を実施し, 従来のエゴグラムはなかった CP「管理する親 (Controlling Parent)」, NC「自然な子ども (Natural Child)」, ACC「従順な子ども (Compliant)」と ACD「主張する子ども (Demonstrative)」を測定する尺度を加えた新しいエゴグラムを開発した (予備調査, 第 1 調査)。信頼性を検討した結果, 何れの尺度とも, 十分な内的一貫性 (第 1 調査) と時間的安定性 (第 2 調査) を確認した。内的一貫性を示す信頼性係数 (α) は, 従来の代表的なエゴグラムである TEG 第 2 版と同等かやや高くなっていた (第 1 調査, 第 2 調査)。

さらに, 併存検査妥当性を確認するために, 従来の代表的なエゴグラムである TEG 第 2 版との相関を算出したところ, CP どうしと AC (TEG 第 2 版) と ACD (本研究で開発した尺度) 間を除いて, すべて .75 を越える高い相関を示した。

CP どうしの相関は .22 と有意ではあるが低い値であった。また, TEG 第 2 版の CP (批判的な親 (Critical Parent)) は本研究の ACD (主張する子ども (Demonstrative)) と高い相関 (.74) を示してい

Table 10

第 1 調査と第 2 調査の新・エゴグラム (仮称) の下位尺度の相関

	第 1 調査	第 2 調査	<i>r</i>
	M (SD)	M (SD)	
CP	17.28 (3.90)	17.06 (4.10)	.81**
NP	16.17 (4.06)	16.23 (4.17)	.82**
A	16.36 (4.39)	15.87 (4.16)	.83**
NC	18.74 (4.55)	18.40 (4.64)	.85**
ACC	18.97 (4.12)	19.19 (3.87)	.82**
ACD	22.30 (4.82)	22.06 (4.75)	.76**
D	16.31 (3.45)	16.43 (3.73)	.78**

** $p < .01, N = 141$

Table 11

新・エゴグラム (仮称) と TEG 第 2 版の各下位尺度の平均値・標準偏差および相関

		新・エゴグラム (仮称)							
		CP	NP	A	NC	ACC	ACD	D	
	M	17.06	16.23	15.87	18.40	19.19	22.06	16.43	
	(SD)	(4.10)	(4.17)	(4.16)	(4.64)	(3.87)	(4.75)	(3.73)	
TEG 第 2 版	CP	21.26 (4.06)	.22**	-.18*	-.03	-.16	-.07	.74**	-.10
	NP	17.53 (4.24)	.51**	.87**	.39**	.52**	-.07	-.01	.61**
	A	17.20 (4.01)	.61**	.52**	.86**	.55**	-.29**	.06	.62**
	FC	19.45 (4.56)	.33**	.51**	.32**	.76**	-.40**	.08	.32**
	AC	19.94 (4.38)	-.14	-.08	-.29**	-.54**	.76**	.09	-.04
	D	14.09 (2.68)	.45**	.67**	.37**	.39**	.02	-.06	.71**

注) ** $p < .01, *$ $p < .05, N = 141$

Table 12
本研究で作成された尺度の内容

下位尺度	概念定義
CP 「管理する親 (Controlling Parent)」	良心、責任感、倫理観、社会的規範、公への意識
NP 「養育的な親 (Nurturing Parent)」	思いやり、共感性、世話好き、受容的、奉仕精神
A 「大人 (Adult)」	理性、現実検討能力、冷静沈着、客観的、合理的
NC 「自然な子ども (Natural Child)」	生まれながらの自然随順の営み、生来の喜怒哀楽、創造性、直観力、好奇心
AC 「従順な子ども (Adapted Child)」	従順、協調性、おとなしい、イイ子、依存的
DC 「主張する子ども (Demonstrative Child)」	ストレートな感情表現、自己主張、自己顕示、自己愛的憤怒
D 「偏倚尺度 (Deviation Scale)」	社会的常識からの偏倚 (逸脱)
Q 「疑問尺度 (Question Scale)」	曖昧さ、優柔不断さ

注) D, Q は妥当性尺度である。TEG 初版および第2版では、その人の検査態度を見る目的で「妥当性尺度」を作成した。今回も行動パターンを見る検査のためそのまま妥当性尺度を採用する。

た。これらの結果は本研究のCP (管理する親 (Controlling Parent)) が、CP (批判的な親 (Critical Parent)) と中程度の関連を持ちながら、ACD (主張する子ども (Demonstrative)) とは異なる側面を測定できていることを示唆している。

TEG 第2版のAC (順応した子ども (Adapted Child)) と本研究のACD (主張する子ども (Demonstrative)) が無相関であったことを合わせて考えると、従来のエゴグラムではCPに吸収されていたACDを新たに抽出できた結果を捉えることができよう。

本研究で抽出されたACCとACDは、Heyer (1987) の研究結果と整合しており、交流分析理論の新しい枠組みに沿った独自尺度が創出できたものと考えられる。本研究で開発した尺度とその測定概念をTable 12に示す。

従来のエゴグラムは自我心理学から派生し、PとCを調整するA (自我) に注目してきた (杉田, 1985)。本研究が開発した新しいエゴグラムでは、Cに焦点を当てるといふ交流分析の新たな視点を、実証的に支えるツールとなるものと期待される。

引用文献

- 芦原 陸・酒井淑子・伊藤章代・陶山彰見・上原真樹子・高尻正子・村上正人・松野俊夫・桂戴作 (1993). 自己成長エゴグラム (SEG) の開発経緯と研究の現状 交流分析研究, 18, 11-16.
- Bern, E. (1972). *What Do You Say After You Say Hello?* New York: Grove Press.
- Dusay, J. (1972). Egograms and the constancy hypothesis. *Transactional Analysis Journal*, 2, 37-41.
- Dusay, J. (1995). Evolution of Transactional Analysis

- 日本交流分析学会第20回大会基調講演
- Heyer, N. R. (1979). Development of a questionnaire to measure ego states with some applications to social and comparative psychiatry. *Transactional Analysis Journal*, 9, 9-19.
- Heyer, N. R. (1987). Empirical research on ego state theory. *Transactional Analysis Journal*, 17, 286-293.
- 池見酉次郎・杉田峰康 (1974). セルフ・コントロール—交流分析の実際— 創元社
- 石川 中・和田迪子・十河真人・伊藤たか子 (1984). TEG <東大式エゴグラム>手引き 金子書房
- 岩井浩一・石川 中・森田百合子・菊池長徳 (1977). 質問紙法エゴグラムの臨床的応用 交流分析研究, 2, 3-13.
- 西川和夫 (1993). 自己志向・他者志向エゴグラム作成の可能 交流分析研究, 18, 37-45.
- 野村 忍・和田迪子・久保木富房・末松弘行・横山和仁 (1993). 東大式エゴグラム (TEG) の改訂とその展開 交流分析研究, 18, 3-9.
- 野村総一郎 (2011). 現代のうつ病をどうとらえるか 野村総一郎 (編) 多様化したうつ病をどう診るか (精神科臨床エキスパート) 医学書院 pp. 1-25.
- 白波瀬文一郎 (2014). パーソナリティ障害 野村総一郎 (編) 抑うつの鑑別を究める (精神科臨床エキスパート) 医学書院 pp. 107-116.
- Stewart, I., & Joines, V. (1987). *TA Today: A New Introduction to Transactional Analysis*. Nottingham: Lifespace Publishing (スチュアート & ジョインズ 深澤道子 (監訳) (1991). TA TODAY-最新交流分析入門 実務教育出版 pp.14-36.)
- 杉田峰康 (1985). 交流分析 内山喜久雄・高野清

- 純（監）講座・サイコセラピー 第8巻 日本文化科学社
- 杉田峰康・新里里春・和田迪子・瀬川京子・石川中（1979）. 新しいエゴグラム・チェックリスト（ECL）について 交流分析研究, 4, 28-40.
- 杉田峰康（1973）. 交流分析と心身症—臨床家のための精神分析的療法— 医歯薬出版
- 和田迪子・伊藤たか子・十河真人・石川 中（1982a）. 新しい質問紙法エゴグラム（東大試案）の作成—予報— 交流分析研究, 7, 13-17.
- 和田迪子・伊藤たか子・十河真人・石川 中（1982b）. 新しい質問紙法エゴグラム（東大試案）の作成—第一報（予備調査）— 交流分析研究, 7, 20-24.
- 和田迪子・石川 中・十河真人・伊藤たか子（1984a）. 新しい質問紙法エゴグラム（東大式）の作成—第二報— 交流分析研究, 8, 33-40.
- 和田迪子・石川 中・十河真人・伊藤たか子（1984b）. 新しい質問紙法エゴグラム（東大式）のパターン分類について 交流分析研究, 9, 5-11.
- 和田迪子・野村 忍（1995）. 交流分析とエゴグラム 東京大学医学部心療内科（編）金子書房 pp.13-29.
- 和田迪子（2013）. Web 調査による質問紙法「新・エゴグラム（仮称）」の開発（第1報）—質問項目の選定と標準化— 日本交流分析学会第38回学術大会発表抄録集, 27.
- 和田迪子（2014）. Web 調査による質問紙法「新・エゴグラム（仮称）」の開発（第2報）—パターン分類— 日本交流分析学会第39回学術大会発表抄録集, 32.
- 和田迪子（2015）. Web 調査による質問紙法「新・エゴグラム（仮称）」の開発（第3報-①）—質問項目の選定, 標準化およびパターン分類— 日本交流分析学会第40回学術大会発表抄録集, 35.
- Wagner, A. (1981). *The Transactional Manager: How to Solve People Problems with Transactional Analysis*. (ワグナー・諸永好考・稲垣行一郎（訳）(1987). マネジメントの心理学—TAによる人間関係問題の解決— 社会思想社 pp.9-11.)
- 渡部麻美・市村美帆・松井 豊・和田迪子（2013）. 質問紙法「新・エゴグラム（仮称）」の信頼性・妥当性の検討—再検査法とTEG第2版との関連から— 日本パーソナリティ心理学会第22回大会発表論文集, 139.

（受稿9月30日：受理10月26日）